イタリア左翼政党の現在

池谷　知明
早稲田大学社会科学総合学術院教授

イタリアに左翼政党は存在するのか

イタリアの左翼政党の現在について考察することが、本稿の課題である。しかし、この課題に答えることは容易ではない。そもそもイタリアに左翼政党が存在するのかという問いがある。左翼政党を概ね欧州議会で欧州統一左派・北欧緑左派同盟(GUE/NGL)および緑の党・欧州自由連合(Greens/EFA)に所属している政党とする場合、それらに属しているイタリアの政党は存在しないからである。2013年上下両院選挙以降、イタリア政治は民主党を中心とする中道左派連合、同盟、フォルツァ・イタリアから構成される中道右派連合、および五つ星運動による三極化状態が続いている。民主党は社会民主進歩同盟(S＆D)に属し、五つ星運動はいずれの会派にも所属していない。かつて西ヨーロッパ最大の勢力を誇った共産党が存在した国で、左翼政党は消失したのか。消失したとするならば、それはなぜか。ポピュリスト政党と目される五つ星運動が、なぜ左翼ポピュリスト政党と言えないのか。本稿では、以上の点に留意しながら、冷戦後のイタリア共産党の変化・変貌について概観し、次にポピュリスト政党である五つ星運動について検討する。その過程で、環境政党についても少しく触れることになろう。最後に2019年末から急速に広がりつつあるイワシ運動について言及したい。

いけや　ともあき
早稲田大学政治学研究科博士後期課程退学。政治学修士。専門分野は、イタリア政治・政治学、比較政治。早稲田大学社会科学部助手、拓殖大学政経学部助教授、同教授等を経て、2013年より現職。
著書に『新・西欧比較政治』(共編著、2015年、一藝社)など。

冷戦後のイタリア共産党

ベルリングェルの指導の下、1976年上下両院選挙で得票率34％まで支持を伸ばしていた共産党であったが、1980年代に入ると、退潮傾向を示した。求められた党改革が実行できないまま、ベルリンの壁が崩壊した。

改革が進むのは1990年代に入ってからである。1990年3月に開催された第19回党大会で党名を変え、党の方針を改めることが決められた。翌1991年1月の第20回党大会で左翼民主党に党名が変更され、社会民主主義路線をとることが決定された。新方針に反対する左派が共産主義再検党を結成した。

左翼民主党に展望が開けるのは、1992年初に発覚し、その後タンジェントポリ(賄賂都市)と呼ばれる全国的な汚職事件後である。政権の中枢にあったキリスト教民主党、社会党が汚職摘発によって衰退する一方で、政権の枠外にあった左翼民主

党は、その影響を受けることも少なかった。中道勢力が退潮する中で、極右政党であるイタリア社会運動とともに、地方選挙を中心に支持を伸ばしていった。

1993年に上下両院の選挙制度が比例代表制から小選挙区・比例代表混合選挙制度に改められた。1994年に入ってキリスト教民主党が解党し、他方でベルルスコーニがフォルツァ・イタリアを結成して政界入りを表明した。こうした状況で、1994年3月に上下両院選挙が行われた。

第二共和制と左翼民主党

1994年両院選挙で、左翼民主党は共産主義再建党とともに左翼連合を結成して、中道連合、右翼連合と政権を争った。選挙というゲームのルール[1]とプレーヤーが変わることによって、憲法改正はなかったものの、イタリア政治は第二共和制に移行したと考えられるようになった。第二共和制の最初の勝者は、ベルルスコーニをリーダーとする右翼連合であった。

左翼民主党は2年後の1996年4月に行われた上下両院選挙で、プローディをリーダーとする中道左翼連合オリーブの木に加わり、ベルルスコーニを首相候補とする中道右翼連合の自由の極に勝利し、主要閣僚を輩出した。1998年2月にはより広範な左翼の結集をめざし、「党」を外して左翼民主主義者と改名し、党章にあった「鎌と槌」も、社会主義のシンボルであるカーネーションに置き換えた。

1998年10月に共産主義再建党がプローディ内閣の閣外協力を止め、同内閣が崩壊すると、左翼民主主義者のリーダーであったダレーマが内閣を組織した。このときに共産主義再建党の方針に反対したグループがイタリア共産主義者党を結成し、ダレーマ内閣を支持した。ダレーマ内閣は2000年の州選挙での敗北を受けて総辞職した。左翼民主主義者は後継のアマート内閣を引き続き支持したが、2001年5月の上下両院選挙で、中道右翼連合に敗れ、下野した。

2006年4月上下両院選挙

中道左翼連合は、2006年4月の上下両院選挙でルニオーネ（「連合」の意）を結成して勝利し、リーダーのプローディが再び政権を率いることになった。ルニオーネの中心勢力はやはり左翼民主主義者で、中道政党のマルゲリータ（「ヒナギク」の意）[2]がこれに次ぎ、さらに共産主義再建党、イタリア共産主義者党など、10を超える政党が加わった。前年に改正された選挙制度[3]の影響を受けて、プローディ内閣は上院でようやく過半数を超える議席を獲得できただけであったので、発足時から不安定性が懸念されていた。後述するように、政権発足後に左翼民主主義者とマルゲリータが合同して2007年10月に民主党が発足していたが、2008年5月に上院で小会派が政権から離脱して過半数を割り込み、信任投票も否決されて、政権は倒れた。

民主党の結成

中道左翼連合の課題は、中道右翼連合に比べて連合内により多くの小政党を抱えていたことと、ベルルスコーニという絶対的な指導者が存在しなかったことにあった。中道左翼勢力を一つの政党にまとめて中道右翼連合に対抗しようとする動きは、第1次プローディ内閣の頃からあった。具体化したのは2004年欧州議会選挙で、プローディの提唱によって左翼民主主義者と中道政党のマルゲリータを中心とした統一リストであるオリーブの木がつくられ、24人の当選者を出した（得票率31.1%）。左翼民主主義者とマルゲリータは2006年両院選挙に際しても、下院でオリーブの木として統一リストを提出していた（上院ではそれぞれがリストを提出）。

プローディ内閣の発足とともに左翼民主主義者とマルゲリータの合同の動きも加速した。2007年2月に「民主党のためのマニフェスト」が発表され、4月に左翼民主主義者とマルゲリータはそれぞれ党大会を開催して、解党と民主党への合流を決定

した。10月には党首に当たる書記長選挙が行われ、左翼民主主義者の党首であり、ローマ市長であったヴェルトローニが選出され、結党大会がミラノで開催された。その後、11月に本部とシンボルが定められた。

2008年4月上下両院選挙と左翼の消失

2008年4月の上下両院選挙は、これまでの選挙と異なる様相を見せた。第2共和制移行後の両院選挙は、1994年選挙を除き、中道左翼連合と中道右翼連合が政権をめざして争い、また、両選挙連合を構成する政党が多いことに特徴があった。ところが、2008年選挙では両選挙連合に加わった政党が減少したのである。

ところで本稿で表記してきた中道左翼連合、中道右翼連合は、イタリア語のcentro-sinistra、centro-destraと-（ハイフン）付きの表記に基づく。しかし、2008年両院選挙の頃からcentrosinistra、centrodestraとハイフンなしで表記されることが多くなった。ハイフンなしの表記は、20世紀半ばにも見られたが、それは中道政党やキリスト教民主党内のポジションを意味し、中道左派、中道右派と訳すべきものである。実際、2008年両院選挙は、中道左翼連合と中道右翼連合との戦いと言うよりも、中道左派連合と中道右派連合との戦いと呼ぶべき状況となった。そもそも両連合を構成する政党が減少した。中道右派連合はフォルツァ・イタリアと国民同盟が自由の国民という統一リストをつくり、これに北部同盟、自治のための運動が加わった。一方の中道左派連合を構成したのは、民主党と中道政党の価値あるイタリアの2党のみであった。

選挙に勝利したのは中道右派連合で、ベルルスコーニが三度政権の座についた。中道左派連合、とりわけ民主党の敗因の一つは左翼小政党を選挙連合から排除したことにあるとされる。共産主義再建党、民主的左翼、イタリア共産主義者党、緑の連盟は虹の左翼という政党連合で選挙に臨んだが、阻止条項を突破できず、議席を獲得することはできなかった。こうして共和国史上初めて左翼政党が議会から消えることになった。

2008年選挙後のいくつかの州選挙、2009年6月の欧州議会選挙でも民主党は振るわなかったため、同年10月の党首選挙で党内左派のベルサーニが選出されたが、左派が力を持つことに不満を待った何人かのリーダーは党を去った。民主党の党内抗争、分裂は、その後も続く。2017年2月にはレンツィの中道路線には反発してダレーマ、ベルサーニらが党を離れた。その後、党内左派の力が強まると、今度はレンツィが党を割った（2019年9月）。民主党は左翼の受け皿にはなっていないだけでなく、中道左派もまとめることができていない。

環境政党

ここで緑の党に目を向けてみれば、欧州のいくつかの国で存在感を示している緑の党は、イタリアにおいては大きな勢力になっていない。最初の環境政党は1986年11月に結成された緑のリスト連盟である。1989年にはプロレタリア民主党、急進党などの指導者が合流して虹の緑が結成された。緑のリスト連盟と虹の緑は、1990年に緑の連盟となった。

緑のリスト連盟が初めて参加した国政選挙は1987年の上下両院選挙で、上院で1議席（得票率1.96%）、下院で13議席（同2.51%）の結果であった。その後の選挙でも、環境政党は全体として党勢を伸ばせず、2006年両院選挙までほぼ同じ議席数および得票率であった。欧州議会選挙でも1～3議席しか獲得できなかった。2008年以降の両院選挙、欧州議会選挙では議席を獲得できていない。

環境政党が存在しないからと言って、環境運動が停滞しているわけではない。実際、1987年、2011年の国民投票で原発政策を否定している。法律の一部、またはすべてを廃止することができる国民投票制度[4]があることで、単一争点政党である環境政党の役割が代替されているのもかもしれない。

五つ星運動

左翼勢力、環境政党が停滞する中で、2013年

上下両院選挙で躍進して注目されたのが、五つ星運動である。五つ星運動はコメディアンであるベッペ・グリッロが中心となって設立した反政党主義に立つ政治組織・運動である。グリッロは2005年から政治運動を行っていたが、2009年に仲間と五つ星運動を起こした。

五つ星運動は2012年春の地方選挙で予想を超えて躍進し、とくにパルマなどの四都市の市長選に勝利したことで注目を集めた。同年秋のシチリア議会選挙でも存在感を示したのち、初の国政選挙となる2013年上下両院選挙では、選挙前の予想を10ポイントほど上回る高い支持を得た。すなわち下院で25.5%の得票率を獲得し、政党単位では第一党となった。上院では民主党の後塵を拝したものの、23.8%の得票率で、自由の国民よりも高い支持を集めた。その後のローマ、トリノ市長選でも勝利した。

2017年9月にインターネット投票によって党首に選出されたディ・マイオが率いた2018年3月の上下両院選挙で、同盟とフォルツァ・イタリアが組んだ中道右派連合には劣ったものの、五つ星運動は政党としては最高の支持を得た（上院で得票率32.2%、下院で同32.7%）。

2018年両院選挙の結果、有権者の支持は、中道左派、中道右派、五つ星運動に分かれた。この三極化は地域的にも現れた。すなわち、北部では中道右派が強く、また南部では五つ星運動が勢力を伸ばした。中道左派連合は低迷したものの、それでも伝統的に左翼の地盤であった中部イタリアの「赤い地帯」でかろうじて踏みとどまった。2018年両院選挙は、イデオロギーおよび地域の、二重の三極化が確認された選挙であった。

五つ星運動は左翼ポピュリスト政党か

三極化と述べたように、五つ星運動の政治的ポジションを左右のいずれかに位置づけることは難しい。五つ星運動の五つ星は、公共用水、持続可能な交通・輸送、持続可能な発展、インターネットへのアクセス、環境の五つの主要争点に関連している。この点だけを見れば、環境を重視した左翼政治運動と捉えることもできよう。一方で、反移民・難民、反EUの立場は、同盟と共通する。一番の特徴は反既成政党で、この点で左右を問わず支持を広げてきた。

五つ星運動には組織上の問題も指摘される。非・政党と自称する五つ星運動は、一般の政党の党則に当たる非・党則を承認すれば誰でも参加でき、地方組織の自律性も高い点で民主的な運動と言える。各選挙の候補者もインターネット投票で選出される。他方で、創立者のグリッロが党首かつ党代表で、また党のシンボルマークを所有し、さらに党員の除名権を有するなど、党内デモクラシーが欠如した、個人政党的な側面をもっていた。実際、除名されたり、離党した議員は少なくない。欧州議会会派に関しては2014年から19年まで、イギリス独立党やドイツのための選択肢とともに自由と直接民主主義のヨーロッパ(EFDD)に属していたが、現在はどの会派にも所属していない。

五つ星運動は、2018年6月に同盟とともにコンテ内閣を成立させた。また2019年9月からは民主党とともに第2次コンテ内閣を支えている。しかし、党勢に陰りが見えており、離党者も後を絶たない。指導力を問われたディ・マイオは2020年1月に党首を辞任した。

イワシ運動

中道左派政党が党勢を伸ばせず、また、五つ星運動も一時の勢いを失う一方で、支持を広げているのが移民排斥を訴える右翼ポピュリスト政党である同盟である。こうした状況で2019年秋から注目されているのが、イワシ運動と呼ばれる市民運動である。この市民運動がイワシ運動と呼ばれるのは、シンボルがまさにイワシだからである。イワシの缶詰（オイルサーディン）のようにぎっしりと団結してサルヴィーニが指導する右翼ポピュリズムに対抗しようとする意図から命名された。

運動は2019年11月にボローニャで誕生した。ボローニャを州都とするエミリア・ロマーニャ州は共

産党の牙城であったが、近年は同盟への支持が広まっている。2020年1月に行われた州選挙では、民主党の現職の州知事が再選を果たし、議会も民主党が第1党の座を守ったが、同盟が第1党になるとともに、同党に所属する州知事が誕生することも予想された。民主党、五つ星運動の支持が下がる一方で躍進する同盟に対する危機感を持つ若者4人が立ち上げた運動は、イタリア各地に広まっている。集会が開かれる広場には、政治家の演説はなく、ステージではミュージシャンが演奏を行っている。さまざまなイワシの絵を掲げた参加者で、広場はまさにイワシの缶詰のように埋め尽くされ、ファシズム、ナショナリズム、人種差別に反対している。

イワシ運動が今後どのように展開するのか、政党へと発展するのかについては、現時点では不明である。しかし、民主党を中心とする中道左派勢力が低迷する中で、同盟に対抗しようとする、この「左翼」市民運動からしばらく目は離せない。

イタリア左翼の現状と課題

以上、冷戦後のイタリア左翼政党の動向を、共産党から民主党への移行を中心に概観した。それは共産主義から社会民主主義への方針の変更、左翼政党から中道左派政党への移行と捉えられよう。こうした変化に反発した左翼勢力が新党を結成したが、大きな勢力にまとまることはできなかった。小政党であっても、連立政権を支えるのに必要な、あるいはその政党が連立を離脱すると政権が崩壊するという政党は有意な政党とされるが、現時点でイタリアには有意な左翼政党は存在しないと言ってよいであろう。

五つ星運動の成功やイワシ運動の台頭を見れば、左翼が重視するテーマが市民から支持されていないわけではない。問題は、そうしたテーマを政治課題として取り上げ、政策にまとめ上げて実施する政治家の問題かもしれない。左翼政治家が抗争を止めず、離合集散を繰り返す限り、イタリア左翼政党に展望は開けないであろう。■

《注》

1　戦後のイタリアの選挙制度は上下両院ともに比例代表制であったが、政権交代をめざして、1993年に選挙制度が改められた。両院ともに小選挙区で定数の4分の3を小選挙区から残り4分の1を比例代表で選出する。この選挙制度の下で1994年、1996年、2001年の両院選挙が行われた。中道左翼、中道右翼への二極化が進むとともに、政権交代も実現した。

2　2000年にキリスト教民主党の後継政党の一つであるイタリア人民党を中心に結成された中道右派の政党連合。2002年に単一政党となった。

3　2005年にプレミアム制と比例代表制の混合選挙制度に改められた。下院では全国集計での最大得票政党（連合）に630議席中の340議席を与え、残りの政党に対しては得票数に比例して議席を配分する。上院では州単位で最大得票政党（連合）に議席の55%を付与し、残議席を比例配分する。このため上院では過半数議席を超える政党が存在しない恐れがあった。実際、2006年には中道左派連合は上院で過半数をかろうじて超えたに過ぎなかった。2013年両院選挙では、中道左派連合、中道右派連合、五つ星運動のいずれも過半数議席を獲得できなかった。

4　憲法改正の要件としての国民投票（憲法第138条）の他、憲法第75条で法律のすべてまたは一部を廃止することができる国民投票を規定している。1986年のチェルノブイリ原発事故を受けて、1987年11月に原子力開発促進に関する3つの法律が国民投票に付され、廃止が決定された。その後、ベルルスコーニ政権の下で原子力開発再開に関する法律が制定された（2009年）。しかし、2001年3月の福島第一原子力発電所の事故を受けて、同年6月に国民投票に付され、同時に実施された水道事業民営化に関する法律などともに、廃止が決まった。

《参考文献》

池谷知明（2012）「第11章　第二共和制へ」、北村暁夫・伊藤武編『近代イタリアの歴史―16世紀から現代まで―』ミネルヴァ書房、237-258ページ

池谷知明（2015）「第4章　野党なき政党の共和国イタリア―二党制の希求、多元主義の現実」吉田徹編『野党とは何か–組織改革と政権交代の比較政治』ミネルヴァ書房、143–170頁

池谷知明（2018）「イタリア両院選挙と政治のゆくえ―三極分裂で混迷を深める政党政治―」『改革者』2018年5月号、30–33ページ

伊藤武（2016）『イタリア現代史―第二次世界大戦からベルルスコーニ後まで―』中央公論社

河原田慎一「イタリアゆるーく『イワシ運動』」朝日新聞、2020年1月24日